

・合川秋穂（東京都）

濁流 全員の中にあなたがいる

日々を生きることは眼前の濁流に飛び込むことに似ている。押し流され、溺れそうなこの世の全員のほんのすこしづつあなたであること。救えるだろうか。

・長谷川格香（宮城県）

アイライン長し白鳥眼るに似て

白鳥のアイライン性はきっとその長く伸びた首にあるはず。目元に孤高の白鳥を眼らせながら、まばたきするたびに散る白い羽のまぼろし。

・中矢 温（愛知県）

四月も死ぬから

トランプタワー用のトランプ

四月も死ぬ、というのは、四月が終わることの比喩か、それとも誰かが三月に続き死ぬのか。トランプを組みあげたそのてっぺんから飛び降りよう。

・からすまあ（神奈川県）

小説のミステリアスな開き方

首都高の後部座席の傾き

心地よい疲れと停滞する時間のなかで傾ぐ後部座席。ゆるやかに身体を凭れさせながらあなたは小説をひらく。ミステリは本のなかでなく現実で起ころる。

・いまはじまるの（兵庫県）

寄り道のカレーの話

明日からお世話になりません

また明日

してもしなくてもいいカレーの話などをして帰る道。明日からお世話になれた  
らきっと楽なのに、お世話にならないひとと会う明日のための「また明日」。

・こはくいろ（大阪府）

ランダムに光るかなしみ  
嘗みを、葬るなけれ  
葬るなけれ。

かなしみに規則や秩序などあるはずがない。ランダムにやつてくる感情をなん  
とかやり過ごしながら、それでも日々を無かつたことにだけはしてはいけない。

・香取小春（宮崎県）

白い、大きい、重たい犬の中に  
入つていこう  
時間を切り開いたら  
真っ暗なんだ

時間の奴隸である私たちが唯一時間から逃れられるとすれば。愛することを具  
現化したらもしかしたら「白い、大きい、重たい犬」になつたり。

・天野若花（福岡県）

「ロン」「ポン」と

夜明けまで鳴く我が腹に

君が忘れた人質は居る

麻雀の「ロン」も「ポン」も他人の捨て牌を欲している声だ。お腹の底で人質としてとられているひととでは、可哀相だけれどアガれない。

・猫背の犬（山口県）

点滅のリズムに合わせて瞬きをすればまだまだ緑の信号

緑の信号の点滅がやがて赤になる。止まれの予感に瞬きをして自分の心の呼吸を合わせてゆく。けれど、ほんとうはいつだつて進めのサインが出ている。

・うたた（岡山県）

踏切の音が電車の中にまで届いたらしく、ふあんになつた

電車を通すため、外の世界の動きを一時停止させる踏切の音。その音のこだまがついに電車内にまでひびくとき。いつか電車も世界も全て一時停止したなら。